「唐宋時代に於ける金銀の研究」疑義二則

宮崎市定

本は讀めそうで仲々讀めないものである。疑義が生ずる位まである本を讀んだら、それだけで自慢するに値する。私は嘗て故加藤繁博士の名著「唐宋時代に於ける金銀の研究」を耽讀すること數次、その疑義をメモしながら、遂に直接博士に質正するの機を得ないでしまつた。いま二則を掲げて、後來者の閲讀の便に供したいと思う。

(1)第二册、五四〇頁、唐の王建送鄭權尚書之南海詩、

市喧盜賊破　金賤海船來

とあるを引かれ、初句を倒叙として讀み、「市喧びすし、盜賊破れて」の意に解されたが、これはどうも餘りに理に流れた解釋で、これでは詩の面白味が全くない。思うに破という字は、玉篇に「解離也」と釋するように、「散ずる」の意味がある。支破、破錢などの破は卽ちこの意味である。すると「盜賊破」は「盜賊散」の意に解せられる。卽ち、盜賊が城を襲いにやつて來たが、市場のあまりの賑やかさに驚いて散走した、という意味であろうか。もしこういう解釋が可能ならば、その次句も、加藤博士が讀まれたような倒挿法「海船來りて、金賤し」の意味ではなく、「金賤くして、その魅力にひかれて、海船來る」と解さなくてはなるまい。大局的に見れば、中國は古來、西アジア等の先進國に比して金價が低い。そこで中國は周邊の藩屬諸國から金を集め、それを纒めて西アジア、印度へ輸出する役目をつとめていたようである。但し王建の詩の場合、外國船が唐で下落した金を買集めるだけに大擧渡來したとは受取れぬ。金はそれ程重要な商品であつたとは思えぬからである。寧ろ廣州地方は金が貨幣として通用し、同時に物價の尺度となつていたので、金價が對外的に下落すると物價もそれに應じて下落し、それにつられて外國船が大いに中國物資を買いに來たと見るべきである。中華民國初年、銀價下落の際に日本人などが上海へ殺到したのと同一轍であろう。

(2)第二册五四六頁以下、第八章第六節「宋代に於ける金銀の輸出入」の中に宋代中國の金銀が、いろいろなルートで國外へ流出した事例を列擧された中に、何故か、續資治通鑑長編卷六八、大中祥符元年正月の記事、

時金銀價貴。上以問權三司使丁謂。謂言。爲西戎輝和爾所市入蕃。乙亥。下詔約束之。

の一條が引用されていない。そのために西域への金銀流出の現象が度外視されてしまつた。加藤博士は史料をカードに取つて利用されたようで、時に控えを失くした事を自ら論文中でことわつて居られる。博士に對しては甚だ失禮に當るが、これはカード制とノート制の長短を示す一つの例で我々に教訓を與える。カード史料は利用には便利だが、一番有用なカードを紛失する虞れがあることは私も經驗がある。

なお加藤博士のこの書とは關係ないが、金銀の問題を取扱う際に必ずといつていい程、よく引合いに出される顧炎武の日知錄卷十一、黄金の條に金銀比價をのべて

幼時見。萬曆中赤金止七八換。崇禎中十換。江左至十三換。

とある中の江左という語を、普通には地名の江左と解せられているようだが、これでは不十分である。江左は江左政權の謂で、古い六朝の意味に使われるのは周知の通りだが、明末、福王が崇禎十七年五月、南京で帝位につき、翌弘光元年五月まで約一年間もちこたえた政權も江左である。黄宗羲の鄭成功傳にも、

章皇帝定鼎之（順治）元年。福藩立江左。改元弘光。

などの用例がある。こういう混亂の際には銀よりも隠匿、持運びに便利な金が重寶がられて、價格が急騰するので、同じような現象は北宋末、金軍包圍下の開封においても見られた所である。